

ジョン・スミスとプラトニズム
—「神知に至るための真の道・方法に関する講話」—

三上 章*

John Smith and Platonism
in
*A Discourse Concerning the True Way or Method of Attaining
to Divine Knowledge*

MIKAMI Akira

This article aims to clarify how Platonism functioned in the thinking of John Smith in his theological and philosophical work, *A Discourse Concerning the True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge*.

Smith's Platonism consists not so much in a legalistic and petrified ideology as in incessant motion and ascent, driven by the love of wisdom and the ultimate truth. This basic mentality is reflected in Smith's understandings of "innate ideas" as being by nature resident within everyone's soul and making it possible to know God, of "Divinity" or "Theology" as "a Divine life" rather than "a Divine science," of the seat and place where the divine truth lies as having to be sought within man's soul, not outside of man, of the purification of man's soul as a prerequisite for attaining to divine knowledge, of warning against premature judgments in order not to fall into errors of dogmatism and fanaticism, and of the way of virtue as the formation of virtue and goodness within man's soul, a true living sense of them, and the vision of God with the eyes of a purified intellect (*nous*).

Smith elucidates the ascents to divine knowledge in accordance with the explanation of the Stoic Platonist Epictetus. He shows that a man's soul progresses step by step to the upper dimensions of contemplating the truth in parallel with the degrees of the purification of the soul. Ascents start from the stage of an obscure opinion (*doxa*) to the stage of a more distinct opinion, then proceed to the lower level of science (*epistēmē*), and ultimately attain to divine knowledge.

This is the way upward which is to be trodden by "the true and sober Christian who lives in Him who is Life itself, and is enlightened by Him who is the Truth itself, and is made partaker of the Divine Unction, and knoweth all things." This was nothing other than the way that John Smith, Platonist Christian, trod and that took him to the home above.

キーワード：ジョン・スミス、ケンブリッジ・プラトン学派、プラトニズム、神知

Keywords : John Smith, The Cambridge Platonists, Platonism, Divine Knowledge

* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

はじめに

本論文は、ケンブリッジ・プラトン学派の宗教哲学者、ジョン・スミスによる「神知に至るための真の道・方法に関する講話」(*A Discourse Concerning the True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge*)を取り上げ、スミスの思索においてプラトニズムがどのように作用しているかを解明する試みである。

政治紛争と神学論争が激しく錯綜した17世紀イングランドの内戦時代(1642-65)と重なる1633年から1688年にかけて、ケンブリッジ大学において古典の文献、特にプラトニズム関連の文献を学び、学寮での説教と講義に従事した一連の哲学的哲学者、または神学的哲学者が存在した。そのなかに数えられるのは、ベンジャミン・ウィッチコット(Benjamin Whichcote, 1609-83)、ラルフ・カドワース(Ralph Cudworth, 1617-85)、ヘンリー・モア(Henry More, 1614-87)、ナサニエル・カルヴァウェル(Nathaniel Culverwel, 1618?-51)、ジョン・スミス(John Smith, 1618-52)、ピーター・ステリー(Peter Sterry, 1613-72)の6名である¹。彼らは、クライスト学寮(Christ's College)で学んだヘンリー・モア以外、全員がピューリタンの牙城であるエマニュエル学寮(Emmanuel College)でプラトン、アリストテレス、およびキケロー、プロティノス、オリゲネスらを、さらにはデカルトやホッブスらを読み、思索を養った学徒たちである。辞書の説明によると²、彼らは教会に関してはピューリタンと高教会派との間に立ち、一貫して教会内の寛容と理解を擁護し、哲学に関しては批判性に欠けており、プラトニズムを倫理学と認識論の領域に適用した、とある。しかし、保守的な日和見主義者像を連想するならば、彼らの本質を見誤ることになる。彼らは何よりも真理を愛し求める哲学者であった。彼らがピューリタンから距離を置いたのはその熱狂主義に対する批判のゆえであり、高教会派から距離を置いたのもその権威主義に対する批判のゆえであった。ペー

コンやホッブスの経験論から距離を置いたのも、経験主義に対する批判のゆえであった。彼らは「啓蒙」の主導者たちからは宗教に固執する反動主義者と批判され、ピューリタンたちからは宗教に無関心な「広教主義者」(the Latitudinarians)³と批判された。しかしながらそれは、カッシーラー(E. Cassirer, 1874-1945)が指摘したように、ケンブリッジ・プラトン学派がもつ批判的精神のゆえであった⁴。

パトリデス(C. A. Patrides)によると⁵、ケンブリッジ・プラトン学派の系譜は、プラトン哲学を独自の仕方で開催したプロティノス、ボルピュリオス、イアンブリコスら新プラトン主義者に連なる。その点では、マルシリオ・フィチーノやピーコ・デッラ・ミランダラたちのフィレンツェの新プラトン主義者に類似している。しかし、プラトンより頻繁にプロティノスを引用し、プロティノスより頻繁に小さな新プラトン主義者たちを引用する点に、ケンブリッジ・プラトン学派の独自性がある。彼らは新プラトン主義を歓迎はしたが、それは無批判な受容ではなかった。神学の面では、オリゲネスを筆頭とするギリシャ教父たちを重用し、西方教父たちをあまり使用しない傾向があるが、アンセルムスとトマス・アキナスは尊重された。カッシーラーが洞察したように、ケンブリッジ・プラトン学派の「プラトニズム」は、プラトン思想の直接的継承でもなく単なる再受容でもない。それはマルシリオ・フィチーノとフィレンツェ・アカデミアによって描かれたプラトン思想の画像と重なり合っている⁶。彼らにとってプラトンは、真の哲学と真のキリスト教との協働を示す証人であった。そのプラトニズムは自説を権威づけるための装飾品ではなく、真理探究そのものであったといえるかもしれない。

1 ジョン・スミスと『講話選集』

ジョン・スミスは、ケンブリッジ・プラトニストのなかで最も哲学的であるという評価を得ている⁷。ケンブリッジのエマニュエル学寮に学び、テューターはケンブリッジ・プラトン学

派の父といわれるベンジャミン・ウィッチコットであった。スミスは修士号を取得した1644年、母校のフェローになることは叶わなかったが、クイーンズ学寮 (Queen's College) のフェローとなり、1652年、34歳で肺結核のため病没するまで⁸、西洋古典文献、特にプラトニズム関連文献の広範な読書と教養に基づき哲学的思索を展開した。スミスが生きた時代は英国ルネサンスの時代と重なる。それはプラトニズム、ストア主義、懐疑主義、および古典古代の模倣の潮流が混じり合い、専門家はもとより一般知識人にも浸透した時代であった⁹。その思索の一端は、友人のジョン・ウォーシントン (John Worthington, 1618-71)¹⁰が編纂した『講話選集』 (*Select Discourses*)¹¹からうかがい知ることができる。この書は、スミスの死後8年を経て編纂・出版された遺稿集であり、10篇の講話をおさめている。

『講話選集』における講話の配列は、以下のとおりである。

- I. Of the True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge.
- II. Of Atheism.
- III. Of Superstition.
- IV. Of the Immortality of the Soul.
- V. Of the Existence and Nature of God.
- VI. Of Prophecy.
- VII. Of Legal and Evangelical Righteousness.
- VIII. Of the Shortness of Pharisaical Righteousness.
- IX. Of the Excellency and Nobleness of True Religion.
- X. Of a Christian's Conflicts with, and Conquests over, Satan.

これらの大部分は、スミスがクイーンズ学寮のチャペルで学生たちに語った講話であり、彼がフェローになった1644年と夭逝した1652年の間に位置づけられる¹²。フェローであると同時に学生監・公会問答教師であったスミスには、学生の啓発と共に教化を目的とした一連の講話

を語る勤めがあった。その講話には古典への言及や古典語による引用が多いが、それは聴衆が古典研究に没頭していた研究者や学生だったためである¹³。これらの講話は専門家たちから以下のように高い評価を得ている。

タロック：「スミスにたいする友人たちの評価は、これらの講話によって十分に支持される。まさにこのことがスミスの才能にたいする最高の証言である¹⁴。」

インゲ：「スミスの講話—知るかぎり最上の大学説教—は、命と光と美に満ちた霊的天才の作品であり、なおかつ本物の哲学者の作品である¹⁵。」

クラック：「ケンブリッジ・プラトン学派がとった全般的立場を最も特徴的に、かつ確実に最も魅力的に提示するものの一つである¹⁶。」

ポーヴィック：「ケンブリッジ・プラトン学派の著作の中で、スミスの『講話』ほど知的で霊的な才能をいやおうなしに示すものはない¹⁷。」

なかでも「神知に至るための真の道・方法に関する講話」¹⁸は、以下のように高い評価が与えられている。

ウォーシントン：「この講話には卓越した意味と、よく踏み固められ凝縮された事柄が満載されており、両者が小部屋の中で寄り添っている。非生産的な観念性に満ち、真のキリスト教的な生活と実践が乏しいこの時代にとって、時宜にかなった所見が数多く見られる¹⁹。」

タロック：「この講話はある意味で一連の講話の中で最もすぐれたものである。いわばスミスの思想体系全体の基調をなしている²⁰。」

この講話を一読して明かなのは、聖書の引用とほぼ同列に、聖書外文献の引用が頻繁に行われているということである。まず講話の冒頭に、テキストとしてヘブライ語聖書 (『詩編』 111篇 10節)、新約聖書 (『ヨハネによる福音書』 7章 17節)、クレメンスの文言 (『ストロマテイス』 III. 5) が列記されている。講話本文においても、プロティノス (205?-270) の引用が群を抜いて多く (およそ25回)、次いでプラトンの引用 (およそ10回) も多い。アリストテレスの引用も2

回ある。他に、オリゲネス (182?-251)、イアンブリコス (250?-325?)、プロクロス (412-485)、シンプリキオス (6世紀)、プルタルコス (46?-120?)、パウサニ阿斯 (115?-180?)、大プリニウス (23/4-79)、アイリアノス (170?-230以後)、キケロー (106-143)、セネカ (前1?-65)、ピーコ・デッラ・ミランドラ (1463-1494) の引用も見られる。さらに、フランシス・ベーコン (1561-1626) の引用さえある。これらは聖書とわけへだてなく引用され、同列に並べられている。だが、これを折衷主義の手法とみなすのは早計であろう。むしろ、スミスに特有の哲学的思索の型を示しているのではないかと思われる。

2 スミスの思索とプラトニズム

それでは、スミスの思索においてプラトニズムがどのように作用しているかを見ることに進みたい。

2.1 先取観念

ベーコン (Francis Bacon) は『学問の進歩』(*The Advancement of Learning*, 1605年) のなかで神学のあり方に言及し、「われわれは、聖教の神学 (われわれの慣用語でいえば神学) は神のことばとみ告げ (聖書その他による神の啓示) にのみ²¹基づき、自然の光 (自然的理性) に基づくものではないと結論する」という見解を述べた²²。神学は神の啓示にのみ基づくといえは聞こえはいいが、要するに神学を理性の本土から信仰の孤島に追放するような主張である。スミスはこのような矮小化された神学観に断じて反対であった。神学は信仰のみの営みではなく、理性の営みでもなければならぬ。

そこで問題となるのが、そもそも理性による神知の認識は可能かということである。スミスは可能であると考えている。その根拠として、人間の魂における「先取観念」(praecognita, προλήψεις) の存在をあげる²³。彼は単に「ストア派の用語では」、というだけであるが、後述箇所²⁴から見て、その意味は、人間の魂の内に普遍的にそなわっている神の観念であると思

われる。たとえばキケローはエピクロスに準拠して、「いかなる国民あるいは民族であれ、神々にたいするある種の先取観念 (anticipatio) は、他人に教わることなしにそなえているものではないだろうか」という考えを述べている。それはエピクロスが「プロレープシス」と呼んだものである²⁵。スミスはエピクロス派の思想に概して批判的であるが、ここではエピクロス派に由来する考え方も使用している。そこに、真理探究における不偏的姿勢というスミスの特徴が表れている。

スミスの先取観念の主張に対して、そもそも先取観念などというものは幻想にすぎないという反論も成り立つであろう。これに対してスミスは、先取観念を保証するものとして、魂の内なる理性の存在を主張する。理性は、キケローがその論文『神々の本性について』で主張するように²⁶、魂における「知識の根本原理」(Radical principles of knowledge) である²⁷。どれほど神の存在や魂の不死性を否定する人がいるとしても、それは後天的にそのように考えるようになったのであり、その人の魂のなかに最初からそなわっている知識の根本原理は容易には消去できない。さらに理性は「卓越性の共通原理」(the Common principles of vertue) ²⁸でもある。たとえエピクロスのように徳と悪徳の区別に疑義を呈する人がいるとしても、その人の魂から「卓越性の共通原理」は根こそぎにはされない。さらに、理性は「真理を保持する力」(the Retentive power of truth) ²⁹である。どんな懐疑主義者であっても、その人の魂から「真理を保持する力」は完全には消滅しない。

スミスはキケローやプロティノスを含む古代の哲学者たちの思想に共鳴して、先取観念がすべての人間の魂に普遍的に内在することを確信する。人間の魂はロックがいうような「(文字を) 消された石板」(tabula rasa) ではない。先取観念は「主のともしび」(the Candle of the Lord) であり、理性の核心である。それは神知探求の道行における出発点であり、大前提である。ケンブリッジ・プラトン学派の他のメンバー

にとつてと同様に、スミスにとつても理性は神知に至るために欠かせないものである。理性は、単なる論証の機能ではなく、深い霊性と宗教性を湛えたものである³⁰。

2.2 生命的な神学理解

スミスの考えでは、魂の内なる理性の存在が神の先取観念を保証し、その先取観念が神知探求の道行を可能とする。この道行の一形式が一般に「神学」(divinity)と呼ばれるものであるが、そもそも神学とは何かが問われなければならない。スミスは神学を「神的学知」(a Divine science) というよりも、「神的生命」(a Divine life) であると捉える³¹。神学はたんなる言葉ではなく、感覚と生命をそなえたものであり、「霊的感覚」(a Spiritual sensation) によって営まれるべきものである。その根拠としてスミスはおそらく、プロティノスの論文「悪とは何か、そしてどこから生じるのか」から、「ものはそれぞれの類似性によって知られる」(γνώσις ἐκάστων δι' ὁμοιότητα γίνεται)³² という文言を引用する。神学が感覚と生命をもつものであるなら、神知はそれに相応する霊的感覚によって最もよく理解される。その霊的感覚と生命とは「善き生」(a Good life) に他ならず、それは神的学知が神的生命になることができるために要請される、先取観念・根本原理である。それはとりもなおさず聖書に見いだされる考えであるとして、スミスは聖書の文言を二つ引用する³³。一つは冒頭に掲げられた文言である。つまり、善き生とは「主を畏れること」であり、それが神学という建造物の土台である。ここで、スミスの聖書引用の性格を確認しておく必要がある。当時、聖書はキリスト教各派によってしばしば絶対的権威として利用されていた。千年王国論を奉じる独立派説教者たちは、急進的な行動を煽るのに役立つ聖書箇所を好んで用いた³⁴。カルヴィニズムを奉じる長老派説教者たちは、神の無償の恩寵を強調するのに役立つ聖書箇所を用いた³⁵。スミスはこういった実利的恣意的な聖書利用とは無縁である。たとえ聖書の文言で

あつても、彼にとつてはそれ自体が無条件で究極の真理なのではなく、むしろ究極の真理を指向し分有するものとして理解されるべきであり、そのかぎりにおいて意味をもつ。

スミスの生命的で動的な神学理解は、神学とは「永遠の光からの真の流出」(a true Efflux from the Eternal light) であるという見方にも表れている³⁶。それは太陽光のようであり、たんに照明するだけでなく熱を与え命をもたらす。こういった自然事物との類比は、プロティノスの「流出」(emanatio) の思想と、その背景にある、物質的光ないし火として考えられた神から知性が流出するという、中期ストア派の学説に沿うものと見ることができよう³⁷。プロティノスはその論文「認識する諸存在とそのかなたのものについて」において、一者からの流出について、「もしわれわれが当を得た描写をするとすれば、かのものよりいわば流れ出る働き、つまり叡知と直知される本性全体を、われわれは太陽から発する光にたとえるだろう」³⁸ と述べている。スミスにとつて、神学とは叡知と直知される本性全体につらなる流出の一段階である。以上の意味における神学をもっともよく実践する者が、福音書の山上の説教でいわれる「心の浄さ」(Purity of heart) をもつ者であり、その人は神を見ること、すなわち「至福な直視」(the Beatifical vision) にあずかることができる³⁹。

スミスは、神知探求の道行を神的学知ではなく神的生命活動であると規定する。この考え方は、ケンブリッジ・プラトン学派が立脚する宗教的認識の型を明瞭に表している。神学は論証的推論の次元に安住するものではなく、神的生命、霊的感覚、善き生の次元に属するものである。この認識形式は、もっぱら思考力や論理力に依拠する18世紀の合理主義の型、イギリス神論、フランス・ドイツの啓蒙主義哲学とは大きく異なっている。

2.3 神的真理の場

神知探求の道行の究極は、神を直視すること

である。しかるに、神の直視という場合、それができるのは人間の肉体の目ではなく、魂の目である。それゆえ、魂がどのような状態にあるかが切実な問題となる。これに関連してスミスは、プロティノスの論文「美について」に言及し、目は「太陽のようにならなければ」(ἡλιοειδής μὴ γινόμενος)⁴⁰太陽を見ることができないのと同様に、魂も「神のようにならなければ」(θεοειδής μὴ γινομένη)⁴¹、すなわち自分の内に神を形成せしめ、神の本性にあずかるものとならなければ、神を見ることはできないという考えを述べる。スミスの考えを補足するなら、神知探求は、プラトンが『パイドロス』において語る、哲学者の魂が天上の美のアイデアを愛し求めて進みつづける、叡智界への上昇に比せられるといえるだろう⁴²。スミスは、使徒パウロの「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」⁴³という文言を、以上との関連で理解する。神的真理に至る正しい道行きは、たんなる教義的知識の集積によるのではなく、魂がたえず神的真理を愛し求め、自分の魂を神的真理にふさわしいように浄化し続けることによる。

それでは魂はどこに神的真理を見いだすことができるのだろうか？ スミスによると、他でもなく神知を愛し求める魂の現実状態こそが、プラトンやプロティノスのいう「真理の野」(πεδῖον ἀληθείας)⁴⁴であり、そここそが神知の力強い活動が発現する場である。それゆえ、スミスは「あなた自身の内に神を求めよ」(intra te quaere Deum)と勧める。それは、プロティノスのいうように、「(魂の内にある)知性による接触によって」(νοηρᾶ ἐπαφή)神に触れるためである。神に触れるという考えについて、プロティノスはその論文「徳について」のなかで、知恵・叡知の本領は知性(ヌース)が持っているものを観ることにあるとし、「知性は(自らの持ち物を)直接的な接触によって持っているのである」⁴⁵と述べている。スミスにとってこの直接的接触は、聖ヨハネの文言でいえば「命の言をわれわれの目で見、われわれの耳で聞き、われわれの手で触れる」⁴⁶ということになる。

スミスは肉体に感覚があるのと同様に、「魂にもある種の感覚がある」(Ἔστι καὶ ψυχῆς αἴσθησις τις)という。これはプロティノスに共鳴するとらえ方である。プロティノスはその論文「生命あるものとは何か、人間とは何か」において、「もし感覚が肉体を通して最終的には魂に至る動であるなら、どうして魂が感覚しないことがあろうか」と述べている⁴⁷。スミスは魂の感覚性について、ダビデの言葉としてヘブライ語聖書の「味わい、見よ、主の恵み深さを」⁴⁸という文言を引用する。ダビデは思弁ではなく感覚を要求する。神知は人間の魂の内に見いだされ、知性によって味わい深く感覚されるものである。

それでは魂が神知を感覚するとはどのような体験なのだろうか？ それは太陽光との類比で言えば、「われわれの心の中にある天的暖気によってわれわれの内に燃え立たせられるもの」(that which is kindled within us by an heavenly warmth in our Hearts)⁴⁹である。「燃え立たせられるもの」といっても、それは燃えさかる信仰的熱狂の火ではなく、われわれの魂の汚れを焼き尽くし浄化する火であり、いわば「われわれの内なる聖性という生ける原理」(a living principle of Holiness within us)である。神知に触れることを可能にするのは、この聖性という霊的生命である。スミスによると、ヘブライ語聖書のいう楽園の「知識の木」と「命の木」⁵⁰は、聖性・霊的生命を指している。神学という知識の木は命の木のそばに植えられ、その樹液を吸収することによって魂の内に善性の実を結ぶことができる。さもなければ、神学は悪い実を結ぶことがありうる⁵¹。神学が善い実を結ぶためには、聖性の樹液が必要である。これに関連して、スミスはピーコ・デッラ・ミランドラを引用する⁵²。それによると、ゾロアスターは弟子たちから、神の輝かしい真理へと飛翔することができる翼をもつ魂を手に入れるためには、何をすべきかと問われたとき、命の水の中に浴するように指示したという。ゾロアスターのいう命の水とは、楽園の四つの川⁵³であり、

枢要四徳を意味する。つまり、スミスにとって命の木が供給する命の水とは、「真の善性」(true Goodness)のことなのである。これに関連して、スミスは「オリゲネス」を引用し、真の善性から湧き出るものこそが、「いかなる論証よりも神的なもの」(θειότερον τι πάσης ἀποδείξεως)であり、これが魂に神的な光をもたらすと述べる⁵⁴。真理は、真の善性から離れて存在することができない。

スミスは神の超越性を保持しつつも、同時に神の内在性を強調する。神的真理の宿る場所は、第一義的には、人間の外なるものではなく、人間の内なる魂である。この点においてスミスは、神と人とのあいだに超えることができない断絶をもうけるピューリタン・カルヴィニズムと大きく異なる⁵⁵。神知を探求する者は、他でもなく自分の魂に留意し、そのなかに神を探さなければならない。この認識形式は、ピューリタン・カルヴィニズムの、ともすれば人間の魂の実状を差し置いて、もっぱら聖書や教義のなかに真理を求めようとするあり方に対する批判としても機能する。神的真理の探究において肝要なことは、魂の内において知性が神に触れることである。この知性の感覚という認識も、ピューリタン・カルヴィニズムの信仰的熱狂に対する暗黙の批判となる。知性は聖性・霊性と相まって、霊的感覚を養われ、やがて善性の実を結ぶ。そのとき魂の内に神的真理に触れる可能性が開かれる。

2.4 魂の浄化

スミスにとって、神知に至る道行きは魂の浄化の過程である。したがって、その道行きは魂の汚れの自覚から始まらなければならない。この考えを下支えするのは、プラトンの思想である。スミスは『国家』の「洞窟の比喩」に言及し、われわれの魂が悪徳や情欲で汚れているかぎり、われわれは洞窟の中で下方に顔を向けた人たちのように、「音」や「影」に親しんでいるだけであり、「真理の生命と実質」(the Life and Substance of Truth)には親しんでいな

い、という⁵⁶。さらに「黒いレーターの湖」(the black Lethe-lake)という表現で、プラトンのいう「忘却の河」に言及する⁵⁷。忘却の河は肉体を指す、とスミスはいう。肉体がもたらす悪徳や情欲は人間の魂をずぶぬれにして、真実在を忘れさせる忘却の河である。魂の内なる正覚の理性は、「感覚という最も深いレーター」(the deepest Lethe of Sensuality)⁵⁸のなかで溺れてしまう。この危険性は聖書が警告するところでもある。『ペトロの手紙 二』1章9節によると、正覚の理性が溺れている状態にある者は、真の卓越性を欠いており、神知の認識に関しては「盲目であり、彼方にあるものを見ることができない。』『ヨハネによる福音書』1章5節によると、汚れた魂はさんぜんと輝く神的真理の太陽を見ることができず、その光を取り込むこともできない。「暗闇はそれ(光)を理解しない」といわれるが、「暗闇」とは汚れた魂の状態にほかならない。『詩編』92篇7節に「愚かな者はそれを理解しない」とあるが、「愚かな者」とは汚れた魂をもつ者である。

情欲と悪徳によって支配され、正覚の理性が溺れている状態の魂が汚れた魂であるが、スミスはさらに踏み込んで、それを魂の「統轄的部分」(τὸ Ἡγεμονικόν)、つまり魂の統括的力の汚れであると説明する。この用語の出典は明示されていないが、これはストア派が一貫して主張した概念である。たとえば、キケローは、「このようにわたしは、ギリシャ人が「ヘーゲモニコン」と称するもののことを、統轄的力(principatum)と呼ぶ」といつている。スミスはこの統轄的力を、「理性」(Reason)、「判断力」(Judgments)、「理解力」(Understandings)と言いかえる。情欲と悪徳によって汚されるのは、この部分である。魂が汚れるということは、「魂の諸感覚」(the senses of the Soul)が麻痺するということである。したがって、魂の感覚を麻痺させる罪と悪徳は実に恐ろしいものである。この点を明示するためにスミスは、プリニウス『博物誌』を引用し、魂の感覚を麻痺させる罪と悪徳を「シビレエイ」(the Torpedo)にたと

える⁵⁹。さらに、ストア派の立場に立つアイリアノス『動物特性論』を引用し、それらを「毒ナス」(Solanum)にたとえる⁶⁰。

スミスは、魂の麻痺・汚れは先に語られた先取観念や共通観念にも及ぶと考える⁶¹。魂における先取観念、すなわち「共通観念」(Common notions)は神知の育成のために活動するものであるにせよ、魂が悪徳によってかき乱され支配されるなら、真の神知とは似ても似つかぬ醜い怪物を生み出す。このような知識について、スミスはプロティノスを引用している。「(それは)多くの質料的なものと交わって、これを自分のなかに取り入れ、自分を劣ったものとするような混合によって変化し、別の形をとるに至る。」⁶² さらに上記のアイリアノスから、「無精卵」(ὑπηνέμια)の話を用いる⁶³。すなわち、コウノトリの卵の上にフクロウがとまると、たちまち無精卵になってしまい、孵化できなくなる。同様に、罪と情欲というフクロウは、理解力を育むべき先取観念というコウノトリの卵から生気を奪い取ってしまう。このようにスミスは、魂に関する考察に博物学の知見も取り入れる。

それでは、魂が汚れたままの状態で神学的知識を集積するとどうなるであろうか？ スミスは、魂が真の善性を欠くなら、神に関するもっとも崇高な思弁であっても、魂を高慢で満たすだけであるという。その一例は、キケローの時代の、理性に従う生活を実践していないにせ哲学者である。キケローはこのにせ哲学者に対して、「自分の教えは知をひけらかすためのものではなく、生きる原理であると考えられる哲学者が、どれほどいるだろうか」(qui disciplina suam ostentatione scientiae, non legem vitae, putabant)と批判を投げかける⁶⁴。『テモテへの手紙 二』3章7節に「いつも学んでいながら、決して真理の知識に到達することがない」という文言があるが、スミスによるとそれは真の善性を欠く魂のことである。それは『創世記』⁶⁵のなかで語られる、ファラオのやせた雌牛のようである。あらゆる言語や学問をむさぼり食お

うとも、あいかわらずやせた醜い姿のままであり、真理の知識に到達することはない。

したがって、真理の知識に到達できる者は、魂の汚れが浄化され、真の卓越性をそなえた人である。スミスはプラトン『饗宴』⁶⁶および『パイドロス』⁶⁷と共に、神的真理に与ることができるのは真の「見神者」(ἐπὶθεός)だけであるという。エレウシス秘儀において最奥の秘儀に与る者だけが、美のアイデアを観照することができるのと同様に、魂の罪と悪徳を浄化された者だけが神を見ることができるとスミスによるとそれは、『エフェソの信徒への手紙』4章21節が示すように、理論的分析によっては得られない、イエスにおいて見られるような真理の認識であり、キリストのような本性をもつ魂が与るものである。そのキリストとはイエスの霊である。『コリントの信徒への手紙 二』5章16節が示すように、肉にしたがって、つまり人間の論証力や知力にしたがってキリストを認識したとしても、それは神を認識したことにはならない。魂が善性をそなえないかぎり、正しい神認識は得られない。『コリントの信徒への手紙 一』2章10節が示すように、善き者たちだけがイエスの霊に与り、神の深みを洞察する。したがって、善き者とは魂の中に善性と卓越性をそなえ、イエスの霊を生活と実践のなかへ展開する人のことであり、そのような人だけが神知の内にある美と命と魅力を味わうことができる。この魂の内なる善性と卓越性の重要性に関連してスミスは、プロティノスを引用する。自分はゼウスの鳥にも劣らないと思いがり、「神を見よ」(βλέπε πρὸς τὸν Θεόν)と叫んだ天がけるグノーシス派の者たちに対して、ソクラテスは「真正の卓越性を抜きにして語られる神は、単なる名辞にすぎない」(ἄνευ ἀρετῆς Θεὸς ὄνομα μόνον)といった、という⁶⁸。

救い主キリストは、神学の「組織・体系」や「正典・信仰箇条」をつくらなかった。救い主の主たる目的は、「聖なる生活」を促進することであった。それこそが正しい信仰に至る真の道だからである。ここでスミスは聖書を連続し

て引用する。まず始めに、冒頭にかかげた『ヨハネによる福音書』7章17節を引用する。「だれでも神の意志を行おうと努めるなら、わたしの教えが神から出たものであるかどうか知るであろう。」聖なる生活を実践すること、それが神の意志を行うことである。したがって、『ペトロの手紙 二』1章8節が示すように、神の意志を行う者は神を知る実を必ず結ぶ。そのように結ばれる神的な実とは、その内に甘美さをもっている。その甘美さは、『コリントの信徒への手紙 一』2章4節でパウロがいう「自然の人」、すなわち肉欲に束縛された人には、味わうことができない。その人の思考力、判断力、理解力が、腐敗した情念によって攪乱されているからである。さらにスミスは、ユダヤ教の文言も引用して、「聖霊は現世的で地上的な情念のなかには住まない」⁶⁹という。新約聖書の連続引用とユダヤ教の文言の引用の後、スミスはプロティノスに戻る。すなわち、「プロティノス」がいうように、神的真理は、肉体的なものから「いわば浄化された感覚によって」(ὡσπερ αἰσθήσει κεκαθαυμένη) 正しくとらえられる、という⁷⁰。

スミスは、古代の哲学者たちも神知に至るこの道・方法を知っていたとみる。すなわち、アリストテレスは若者たちに、道徳上の荘厳な諸教訓に手を出す前に、まず「若者に特有の情動の熱烈さと軽率さ」を冷却・緩和しなければならぬと教えた⁷¹。ピュタゴラスも、弟子たちに哲学のより高次の奥義を伝授するにあたり、「彼らの心の冷静さと道徳的性格」を試すいくつかの方法を用意していた、といわれている⁷²。さらにスミスは、「プラトニストたち」(the Platonists) の見解として、プラトンやプロティノスに言及する。彼らは、魂が地上的な感覚と情念から浄化されないかぎり、「彼らの神的形而上学」(their divine Metaphysics) に進むことはできないと考えた⁷³。ソクラテスのいう「純粋に哲学し」(καθαρώς φιλοσοφείν)、心から神的真理を理解しようとする者たちは、「肉体からの分離」(χωρισμός ἀπὸ τοῦ σώματος)⁷⁴を切に求める。肉体からの分離がプラトン主義者

たちの哲学の目標であった。それはプラトンによって「死の練習」(μελέτη θανάτου) とも表現されている⁷⁵。「叡知界の事物の正しい観想」(a right Contemplation of Intelligible things) のためには、魂が肉体から分離することが不可欠である。プラトニストたちが数学を重視したのも、感覚に頼るあり方を「彼らの数学学習・数学的観想の数々」(their Mathemata, or Mathematical Contemplations) によって払拭するためだった。肉体からの魂の分離の過程は、プラトンやプロティノスによって「洞窟からの上昇の数々」(ἀναβάσεις ἐκ τοῦ σπηλαίου) と呼ばれている⁷⁶。「肉体という汚い洞窟」から抜け出し、上昇することによって、はじめて魂は「光と不死なる実在の地」(the land of Light and Immortal Being) のなかに、その知性的部分を確実に踏み立たせることができる⁷⁷。

肉体的なものからの分離という考えは、程度の差こそあれケンブリッジ・プラトン学派に共通するものである。しかしながら、この点においてスミスは、他のメンバーよりも徹底している。この徹底性は、神知に至るためには、どうしても知性の感覚が鋭敏になる必要があるという洞察に由来する。この霊的感覚の鋭敏性は、魂に卓越性と善性が備わることと歩を一つにする。しかるに、卓越性と善性は、肉体的なものに属する悪徳からの分離によって得られる。

2.5 性急な判断への警戒

スミスは以上の論述に基づき、信仰に関して性急な判断を下すことに対して、警鐘を鳴らす。すなわち、信仰の問題に関してはさまざまの異なった立場があるが、理性と聖性と慈愛に裏打ちされた判断を抜きにして、性急にいずれかの立場に組してはならない、という。なぜなら、何らかの教派の教説を性急に受け入れるということは、その教説の健全な部分だけではなく、誤った部分をも取り込む危険があるからである。スミスは明言を控えてはいるが、この発言は当時のイングランドの政治状況を鑑みてのものであろう。当時、議会において長老派と独立

派の対立が激化する中で、クロムウェルとその軍隊が政治勢力として台頭し、革命が急進化しつつあった。庶民院 (the House of Commons) は、カルヴァン派とアルミニウス派、長老派と独立派、高教会主義国教会派と低教会主義国教会派など多様な熱狂者たちのつぼだった。各派は自己の神学・政治イデオロギーを押し通し、相手を排除しようとしていた。中立の立場はゆるされず、危険でもあった。革命半ばのこの時、穏健さと相互理解を保つ余地はほとんどなかった⁷⁸。

こういう状況のなかでスミスは、教派主義・党派主義の危険性に対して警戒をうながす。彼は、フランシス・ベーコンのいう「洞窟のイドラ」(Idola specus) に言及し⁷⁹、洞窟の中で下方に向けて縛られた者たちは、「生得的な諸偏見と虚偽の諸前提」(Innate Prejudices, and deceitful Hypotheses) から免れないという指摘をする⁸⁰。スミスがベーコンを引用するのはめずらしいが、真理の探究においては偏向性を避け、広くさまざまな意見に聞こうとする謙虚な姿勢をここにも見ることができる。彼はプラトニストたちの精神に従い、「哲学をしようとする者は、判断において自由でなければならない (Ἐλεύθερον εἶναι δεῖ τῇ γνώμῃ μέλλοντα φιλοσοφεῖν)」⁸¹ という。スミスは経験論哲学者のベーコンにも一致点を見いだすことができるほど、柔軟な思考力をもっていた⁸²。自由な判断とは、理性と聖性と慈愛に裏打ちされた判断である。それゆえ、真理を見いだすであろう者は、「自由な判断と、浄められた心」(a free judgement, and a sanctified minde) で真理を求めなければならない⁸³。傍証のためにスミスは、連続して聖書の文言を引用する。『マタイによる福音書』7章8節 (『ルカによる福音書』11章10節) の、「求めよ、さらば与えられん」という文言は、以上の意味での自由な判断のことをいっている。『ヨハネによる福音書』7章38節の、キリストを信じる者はその内から生きた水が川となって流れ出るといふ文言も、その人の魂の内から真理がほとばしり出るといふことをいっ

ている。『箴言』5章15節の、自分自身の井戸から水を飲み満たされるという文言も、同じことをいっている。『出エジプト記』16章14-35節や『ヨハネによる福音書』6章31-33節、49-51節、58節の、天からのマナとは真理のことであり、それが降るのは他でもなく真理に与る者の魂の上にてあり、その魂は真理を食し、永遠に生きる⁸⁴。

真理には善性が伴わなければならないというスミスの主張は、すべての人の魂に善性に関する何らかの知識・感覚が生得的にそなわっていることを前提している。これに対して、もしこの前提がまちがっていたらどうなるのか。魂があまりにも悪に染まり、善性への知識・感覚が完全に消失している人もいるのではないだろうか、という反論もなりたつであろう。この反論に対してスミスは、どんなに悪しき者であっても、その魂の奥底には善性に関する「知識の根本原理のいくつか」(some Radical Principles of Knowledge) が宿っており、それらは感覚の下劣さによって暗くされることはあっても、消失することはないという⁸⁵。スミスは、悪しき者の例として、神の存在を否定したディアゴラス (Diagoras of Melos)⁸⁶、神の存在を疑ったプロタゴラス (Protagoras)⁸⁷、理性的靈魂の不死を疑問視したディオドロス (Diodorus Siculus)⁸⁸ を挙げる。このような人たちでも、魂に刻印された神知の根本原理は完全には消失していない、とスミスはいふ。また、エピクロスのように善悪の区別を疑った者であっても、その者から「卓越性の共通原理」(the Common Principles of Vertue) は根こそぎにされてはいない。また、どんなに極端な懐疑主義者の場合でも、「真理の保持力」(the Retentive power of Truth) は弱くなっているにせよ、根こそぎにされてはいない。要するに、「神と卓越性の共通観念」(the Common Notions of God and Vertue) が、すべての人の魂に刻印されているということほど明らかなことはない、とスミスはいふ。それはアリアヌス (Arrianus)⁸⁹ も認めていることである。スミスにとって、魂にそなわる「われわれの反省機能」(our Reflexive

Faculty) は幾何学の論証よりも明白である。理性はどんなに悪しき者にもそなわっており、どれほど弱められても消失することはない。たとえば、悪しき者であっても、時には「悪徳への嫌悪」(Distasts of Vice) や「卓越性への愛好のひらめき」(Flashes of love to Vertue) をもつことがある。これは理性の光がどんなに暗くなったとしても、消失することはないことを示す証拠である⁹⁰。

以上のように、スミスは信仰に関する性急な判断に警告を發し、理性と聖性と慈愛に裏打ちされた自由な判断が大事であることを主張する。この主張は、信仰の独断と熱狂に対する鎮静剂的機能をもつ。スミスの主張の根底には、例外なくすべての人の内に卓越性を志向する理性のともしびが宿っており、それは決して消えることがないという肯定的な人間観がある。人間の全面的墮落を主張するピューリタン・カルヴィニズムと対極に立つ見方である。そこには、どれほど武力衝突が避け得ない社会状況にあっても絶望せず、あくまでも対話と共存の可能性を保持しようとする強い意志が湛えられている。

2.6 卓越性の道

スミスの考えでは、神知に至る真の方法は「卓越性の道」(the Way of Vertue) である。それは、なすべきことを知るための「方法」というよりは、知っているかもしれないことを行う「意志」(Wills) である⁹¹。しかるに、意志の原動力としてそれを発動させるものは、魂の内における「卓越性と善性」(Vertue and Goodness) であるとして、スミスは次のようにいう。

But all that Knowledge which is separated from an inward acquaintance with Vertue and Goodness, is of a far different nature from that which ariseth out of a true *living sense* of them, which is the *best discerner* thereof, and by which also we know the true Perfection, Sweetness, Energie, and Loveliness of them,

and all that which is οὔτε ῥητὸν, οὔτε γραπτὸν, that which can no more be known by a naked Demonstration, then Colours can be perceived of a blinde man by any Definition or Description which he can hear of them.

しかし、卓越性と善性を魂の内において熟知することから切り離された知識は何であれ、それらの真に生き生きと感覚から生じる知識とは、はるかに性格を異にする。この感覚はそれらの最善の識別者であり、またそれによってわれわれはそれらの真の完全性、甘美、動力、美しさを知り、さらには「語り得ず、書かれ得ない」(οὔτε ῥητὸν, οὔτε γραπτὸν) すべてのものを知る。それは単なる論証によっては知り得ないものであり、あたかも盲人は色の定義や説明を聞くことはできても、色を視覚することはできないと同様である⁹²。

神知は卓越性と善性の「真に生き生きとした感覚」(a true living sense) であり、それらの「最善の識別者」(the best discerner) である。それはプロティノスがいうように、「語り得ず、書かれ得ない」(οὔτε ῥητὸν, οὔτε γραπτὸν)⁹³ほどすぐれたものを体験的に知ることである。理性は、感覚と体験の機能をもつ。先にスミスは、神に関する先取観念が汚されないように留意すべきことを述べたが、ここでその重要性を再度強調する。神についての先取観念がすべての人の魂にそなわっていることは明白だが、魂がその本性を維持するための実践を怠るなら、先取観念は暗雲で覆われる。プロティノスがいうように、魂が「肉体で満ちている」(πλήρης τοῦ σώματος) かぎり、すなわち欲望の満足を追い求めているかぎり、魂の内における神に関する先取観念や共通観念は眠りをむさぼる⁹⁴。その結果、魂は、プロクロスがいうように、動物的生に特有の「生成の力」(γενεσιουργὸς δύναμις) が神に関する観念と混合し⁹⁵、理性は、プロティノスがいうように、「後から生じた劣悪な思いなしと同化されてしまう」(σύμφυτος κακαίς ταῖς ἐπιγινόμεναις δόξαις)⁹⁶。それゆえわれわれ

は、自分自身を肉体的なものからいやましに撤退させ、魂を劣悪な肉への悲惨な隷属から自由にするよう奮闘しなければならない、とスミスはいう。この考えは、プラトンやプロティノスの哲学における、肉体の牢獄に拘束された魂の解放を目指す思想を踏襲していることは、明らかであろう⁹⁷。卓越性の道とは、肉体的事物からいやましに退き、魂をこのみじめな隷属状態からできるだけ解放するように努めることである。言いかえると、卓越性の道とは、感覚の目を閉じて、知性の目を開く道行である。魂には、プロティノスがいうように、「万人がもっていないが、わずかな人しか用いていない」(ἦν ἔχει μὲν πᾶς, χρώνται δὲ ὀλίγοι) 別の目(つまり心眼)がそなわっており⁹⁸、それを目覚めさせることが肝要である。魂が知性の目を目覚めさせるとき、神的世界の光が魂に降り注ぎはじめる。すなわち、プロティノスのいう、あの聖なる「照明の数々」(ἐλλάμψεις)が魂のなかに射し込み、魂の目は神自身の光に照らされて、神を見るであろう⁹⁹。

これに関連してスミスは、再び甘美のモチーフに言及する。『詩編』19篇11節の「蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い」という文句は、神知の果実の甘美を表す。またプルタルコスがいう、ヘルメスの神官たちが聖なる食物を口にしながら叫んだ「真理は甘い」(γλυκὴ ἡ ἀλήθεια)という言葉も、神学的真理の果実の甘美を表す¹⁰⁰。このようにスミスの見るところでは、人間には肉体の目のみならず知性の目が備わっており、卓越性への道行のなかでそれを開眼させようとする努力を不断に行うなら、やがて神を見ることも不可能ではない。決定的に重要なことは、理性が物體的な次元に安住せず、神の霊の偉大な力によって、神との交わりに引き上げられることである。その時、理性は「感覚」(sense)となり、確実な原理に基づく信念は「直視」(vision)となる、とスミスはいう。かつてはプラトニストたちのいう「ディアノイア(思惟力・論証力)による」(τῆ διανοίᾳ)神との交わりだったものが、今や「ヌースによる」(τῷ

νῷ) 交わりとなる。かつてはアリストテレスのいう「ロゴス・アポデイクトス(論証的理性)による」(λόγῳ ἀποδεικτικῷ)による理解だったものが¹⁰¹、今や「ロゴス・アポパンティコス(直証的理性)による」(λόγῳ ἀποφαντικῷ)理解となる。そのとき魂は肉体の感覚にかき乱されることなく、「知性の平静さ」(γαλήνη νοερά)¹⁰²をもって神を至福の心で、しっかりと、変わることなく見るであろう¹⁰³。スミスにとって卓越性の道行の究極は、ヌースの目で神を見ることなのである。

スミスは、思惟力・論証力による神認識の次元にとどまることに満足しない。この姿勢は、論証によって神に接近しようとするロックのそれとはまったく異なる¹⁰⁴。ロックは冷たい「証拠」(evidence)に依存するが、スミスは暖かい「体験」(experience)に依存する。神知は究極において知解ではなく実感である。スミスは断じて理性をないがしろにはしないが、神知に関するかぎり、それに触れることができるのは、数理的確実性ではなく霊的感覚である。

2.7 神知への上昇という観点から見た人間の四段階

スミスは以上の論述のまとめとして、シンプリキオス『エピクテトス『手引き書』注解』(*Simplicii Commentarius in Epicteti Enchiridion*)に準拠して、神知への上昇という観点から見た人間の四段階について述べる。ストア派哲学者エピクテトス(55年-135年)の思想を伝える『手引き書』は実践の哲学の入門書であり、古来、キリスト教の側からも非キリスト教の側からも尊重されてきた。新プラトン主義哲学者シンプリキオス(490年頃-560年頃)もその一人であり、アリストテレスの著作のいくつかについて広範な注解を書くと共に、エピクテトス『手引き書』の注解を書いた。スミスがこの注解を講話の締め括り部分の論述に使用しているところに、彼の思索の精髓がうかがわれるであろう。

①「生成と練り合わされた人間」(ἄνθρωπος

συμπεφυρμένος τῇ γενέσει) ¹⁰⁵

第一段階の人間は、「多なる人間」(ἄνθρωπος ὁ πολὺς) である。つまり、肉体と魂からなる複合的で雑多なる人間である。この段階の人間がもつ知識は、プルタルコス of 文でいえば、「おぼろげな思わく」(ἀμυδρὸν δόξαν) である¹⁰⁶。その理性がもつのはせいぜい「諸感覚と同じ思わく」(ὁμόδοξος ταῖς αἰσθήσεσι) である。この人間には、ストア派のいう「想念としての生」(βίος ὑπόληψις) というモットーがふさわしい。その生は思わくと想像に操られる。その人間は、プロティノスの文では、「背後に(観照の妨げとなるような)重荷を背負っている」(ὀπισθοβαρεῖς) ¹⁰⁷。

②「理論的に相応する本質をもつ人間」(ἄνθρωπος κατὰ τὴν λογικὴν ζωὴν οὐσιωμένος) ¹⁰⁸

第二段階の人間は、自分の本質を理性と知性とみなす。魂は支配するものであり、肉体は隷属するものであると考える。この人間にとって、卓越性と善性に関する「共通観念、あるいは共通原理」は、明白で安定している。したがって、この人間は「より明白で明瞭な思わく」(τρανεστέραν καὶ ἐμφανεστέραν δόξαν) をもつといえる。すでに浄化の途上にあるからだ。あるいは、プラトンの言葉では¹⁰⁹、「低次の秘儀」(Mysteria minora) に与るのにふさわしい者ということになる。真理に関する「生得観念」(Innate notions) がいまだ乏しいとしても、真の卓越性の実践によってやがて満たされ、高められることができる。それゆえ、ストア派の人たちは、「このような人間には倫理的・政治的卓越性がふさわしい」(ὅτι τοιοῦτῳ προσήκουσιν αἱ ἠθικαὶ καὶ πολιτικαὶ ἀρεταὶ) と考えた¹¹⁰。より高次の流出である神的卓越性に与るにはまだ早いにしても、その準備段階として倫理的・政治的卓越性の道を実践するなら、やがてそれは神的真理の観照という実を結ぶであろう。

③「すでに浄化された人間」(ἄνθρωπος ἤδη κεκαθαρμένος) ¹¹¹

第三段階の人間は、上記の、より低次の卓越性から浄化され、肉体からの飛翔をいやましに続け、自分自身に回帰しつつある人である。『ペトロの手紙 二』1章4節, 2章20節の文言では「情欲に染まったこの世の汚れを免れた」人である。この段階の人間が与るのは、「非嫡出の知」(νόθη ἐπιστήμη) である。たんなる思弁的な思わくは凌駕しているが、魂がこの段階に安住するなら、プロティノスのいうように、「自分自身の本性に満たされて」(πληρωθέντες τῇ ἐαυτῶν φύσει)、つまり自分自身の卓越性と知識に慢心して、腐敗墮落してしまう¹¹²。傲慢にも「知者はユピテルとさえ幸福を競うであろう」(Sapiens contendet cum ipso Jove de felicitate) と叫んだ、かのストア派の人物のように¹¹³、天上の世界から遠ざけられるであろう。自らが神の座に着こうとも、それは自己欺瞞にすぎず、かの自らの神殿の中に自分を祀ったペルシャ王コスロエスのように、物笑いの種になるだけであろう。この段階の知に「謙虚さ、および自己の欠乏と自己の空虚さの深い自覚」(Humility, and a deep sense of Self-penury and Self-emptiness) が伴わなければ、魂はこれ以上真の神知へ上昇することはできない¹¹⁴。

④「観想的人間」(ἄνθρωπος θεωρητικός) ¹¹⁵

第四段階の人間は、天上の神的真理を求める愛によって¹¹⁶自分自身の理論的生を脱却し、至高の生に突き進む人である。その人は、プロティノスの文では、「(自分自身の) 中心と(神的實在の) 中心とを結合し」(κέντρον κέντρῳ συνάψας) ¹¹⁷、それと一つになろうと努める。その人がもつのは、「神知」(θεῖαν ἐπιστήμην)、すなわち真の神的知恵であり、それは「知性的生において」(ἐν νοερᾷ ζωῇ) 発揮される。そのような知識は常に「神的卓越性」(Divine virtue) を宿している。この神的卓越性は、魂と神との至福な合一により生じ、神のそのような完全性への熱烈な愛によって描かれる、その生き生きとした模写にほかならない。この神知は、プロティノスがいうように、魂を美しいものに変え、神的美を愛するものに変

える¹¹⁸。また、パウサニアスがいうエロースとアンテロースのように、神的愛と神的浄さは相まって神知を高揚していく¹¹⁹。この神知に与る人が「本物で正覚のキリスト者」(the true and sober Christian)¹²⁰であると、スミスはいう。

Though by the *Platonists* leave such a *Life* and *Knowledge* as this is, peculiarly belongs to the true and sober Christian who lives in Him who is *Life* itself, and is enlightened by Him who is the *Truth* itself, and is made partaker of the *Divine Unction, and knoweth all things*, as S. John speaks. This Life is nothing else but God's own breath within him, and an *Infant-Christ* (if I may use the expression) formed in his Soul, who is in a sense ἀπαύγασμα τῆς δόξης, *the shining forth of the Father's glory*.

このような「命」と「知識」はプラトン主義者たちのところから出発するにせよ、格別に、本物で正覚のキリスト者に属するのである。そのようなキリスト者は、「命」そのものである方の内に生き、「真理」そのものである方によって照らされ、聖ヨハネがいうように¹²¹、神的塗油に与る者とされ、すべてのことを知っている。この「命」はその人の内にある神自身の息に他ならず、(こういう表現が許されるなら)その人の魂の内に形成される「一人の幼児キリスト」であり、ある意味で「栄光の光輝」、父の栄光の発光である¹²²。

このように、スミスはプラトニズムに立脚しながらも、しばしば聖書に戻り、そして再びプラトニズムに転ずる。プラトニズムと聖書は協働者として、キリスト者の究極の目的に突き進む。上記の言葉に続けて、スミスは以下のように語る。

But yet we must not mistake, this Knowledge is but here in its Infancy; there is a higher Knowledge or an higher degree of this knowledge that doth not, that cannot, descend

upon us in these earthly habitations.

しかしながら、私たちは誤ってはならない。この知識はここではまだ幼児の段階である。より高次の知識、あるいはこの知識のより高度の段階というものがあり、それは地上の住まいである肉体の中にある私たちに降らないし、降ることもできない¹²³。

この地上の肉体の中にあるかぎり、私たちの魂はより高次の知識に与ることができず、『コリントの信徒への手紙一』13章12節にあるように、神の似姿を「ただ鏡のうちに」おぼろげながらしか見ることができない。魂にまわりつく「私たち自身の幻影の力」(our own Imaginative powers)¹²⁴に妨害されるためである。しかし、善き人々の魂はこれにひるむことなく、神の直視を目指す道をたゆまず上っていく。それは他でもなく34歳で帰天したスミスの道行きでもあった¹²⁵。

おわりに

教派神学の宗教用語に慣れ親しんだ観点からすると、スミスははたしてキリスト者なのかプラトニストなのかと、いぶかしく思われるかもしれない。キリスト者なのかという問いに対しては、この講話の結びの部分において「本物で正覚のキリスト者」(the true and sober Christian) について語る熱い思いから、スミスが自己を心からキリスト者として同定していることは間違いない。プラトニストなのかという問いに対しては、講話の全般的論調から見て、スミスがプラトニストであることは疑いの余地がないであろう。ただし、そのプラトニズムは矮小化し硬直化したイデオロギーではない。むしろそれはソクラテス・プラトンに見られるような、いいかげんな臆見や不確かな知識に満足することなく、ひたすら本当の知を愛し求めてやまない愛知者としての哲学者を特徴づける精神性である。それは独断を排除し、他者との冷静でねばり強い対話によって、共に確実な知へと前進しようとする姿勢である。性急な判断を避

け、神与の理性によって問題を徹底的に吟味しようとする態度である。そこにおいて働くのが、スミスの愛知者としてのプラトニズムである。

したがって、天国に到達しようとする信仰の情熱において、スミスは『天路歷程』の「クリスチャン」に引けを取らないが、そのプラトニズムは、天国への到達という宗教概念を神知への到達という哲学概念に深化せずにはおられない。イギリス経験論哲学は論証能力としての理性にかぎりない信頼を置いたが、それに対してスミスはプラトンの靈魂観において重要な位置をしめる理性を心から信頼した。プラトンが大事にしてやまない魂における理知的部分は、スミスにとって、「先取観念」としてすべての人間の魂にそなわっている理性の種子である。この理性の種子は神を認識し、神と交わる可能性を秘めており、大事にかつ適切に育まれることによって、やがて神知へと開花することができる。この神知の可能性への明るい展望は、人間の生まれたままの自然状態を「(文字を)消された石板」(tabula rasa)であると見なすロックの淡泊な考えと対照的である。また、それは、すべての人間は生まれながら全面的に墮落しており、神の予定と恩寵によらなければ救われることはできないとする、ピューリタン・カルヴィニズムの暗い宿命論的救済観とも大きく異なる。

神をどこに見いだすことができるかということとは、人間の魂の切なる叫びであるが、イギリス経験論哲学は神を理性の本島から切り離し、信仰という名の離島に押し流した。神は信仰にすぎない善男善女に属することがらとなり、理性に従って生きる知者には無縁のことがらとなった。しかし、スミスの考えでは、真の意味で理性に従う生こそ、神知に至るために欠かせない要件である。ピューリタン・カルヴィニズムは、人間の「罪」を強調し、罪は神と人とのあいだにけって超えることができない断絶をつくったとして、神を人間の手が届かないはるか遠くに押しやった。しかも、罪は人間にはいかにしても処理できないものである。これに対してス

ミスは、罪の説教で人間を威圧しない。むしろ彼が語るのは、魂の「汚れ」とその浄化の福音である。魂が汚れから浄化されるなら、神に近づくことが十分に可能である。しかも、汚れは人間に処理できるものである。天国を目指す「クリスチャン」は、エピクテトスが教示するような段階を順次上昇していくことによって、その魂を肉体的なものから徐々に浄化されていく。それと共に、その魂の内なる「一人の幼児キリスト」(an Infant Christ)は、次第に成長していく。すなわち、魂の内なる理性の感覚がいやまに鋭敏なものに変えられていき、ついに神知に到達する。理性はいわば秘儀の最高段階にあずかり、「見神者」(ἐπόπτης)になることができる。

ストア派のプラトニスト、エピクテトスの説く「おぼろげな思わく」、「諸感覚と同じ思わく」の段階から「より明白で明瞭な思わく」への上昇、さらにそこから「非嫡出の知」の段階への上昇、そしてついには究極の「神知」(Divine Knowledge)・神的生への到達は、「本物で正覚のキリスト者」の道行である。

1. [Ed.] F. L. Cross and E. A. Livingstone, *The Oxford Dictionary of the Christian Church*(Oxford University Press, 1977), 271. F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists A Study*(J. M. Dent and Sons Ltd., 1926), ix.
2. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 271. ケンブリッジ・プラトン学派については、注1で挙げた著作の他に、cf. エルンスト・カッシーラー 花田圭介 監修・三井礼子 訳『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』(工作舎、1993年)；新井明・鎌井敏和 共編『信仰と理性 ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』(御茶の水書房、1988年)。
3. Cf. E. A. George, *Seventeenth Century Men of Latitude*(London: T. Fisher Unwin, 1908).
4. カッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス』、53-54.
5. [Ed.] C. A. Patrides, *The Cambridge Platonists* (Edward Arnold, 1969), 1-8.

6. カッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス』、30.
7. Cf. J. Tulloch, *Rational Theology and Christian Philosophy in England in the Seventeenth Century*, vol.II (Elibron Classics, 2005), 121-193、特に121; E. T. Campagnac, *The Cambridge Platonists*(Oxford at the Clarendon Press, 1901), XXXIII:「スミスは宗教哲学に挑み、宗教の諸原理は何か、またそれらはいかにして把握されうるのかを探究した。」スミスについては他に、cf. John Worthington, John Smith *Select Discourses* 1660(Garland Publishing, Inc., New York & London, 1978), III-XXXI; [Ed.] C. A. Patrides, *The Cambridge Platonists*, XXIX-XXX; [Ed.] G. R. Cragg, *The Cambridge Platonists* (University Press of America, 1968), 75-76; [Ed.] C. Taliaferro and A. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality*(Paulist Press, 2004), 20-33; F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 87-109.
8. スミスはクイーンズ学寮のチャペルに埋葬された。Cf. C. Taliaferro and A. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality*, 205.n.175.
9. S. Hutton, “Platonism, Stoicism, Scepticism, and Classical Imitation”, in [Ed.] M. Hattaway, *A Companion to English Renaissance Literature and Culture*(Blackwell Publishing, 2008), 44-57.
10. ウォーシントン、スミスと共にエマニュエル学寮に学んだ同年齢の友人であり、本書の出版時にはジーザス学寮(Jesus College)の学寮長(在職1650-60)であった。
11. John Worthington, *Select Discourses* (London, 1660).
12. F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 90.
13. [Ed.] G. R. Cragg, *The Cambridge Platonists*, 75.
14. J. Tulloch, *Rational Theology*, 134.
15. W. R. Inge, *Platonic Tradition in English Religious Thought* (Longmans, Green & Co., 1926), 62.
16. [Ed.] G. R. Cragg, *The Cambridge Platonists*, 75. [Ed.] C. Taliaferro and A. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality*, 29 も同様の評価を与えている。
17. F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 87.
18. 邦語訳として、cf. 矢内光一 訳・注「ジョン・スミス「神に関する知識に至るための真の方法」」、横浜国立大学人文紀要、第1類、哲学・社会科学34、171-186 (1988年)。
19. John Worthington, *Select Discourses*, XII-XIII.
20. J. Tulloch, *Rational Theology*, 141.
21. 下線は筆者。
22. “We conclude that sacred theology (which in our idiom we call divinity) is grounded only upon the word and oracle of God, and not upon the light of nature.” Francis Bacon, *The Advancement of Learning*, XXV.3. 邦訳は、服部英次郎・多田英次 訳『学問の進歩(岩波文庫)』(岩波書店、1983年)を使用した。
23. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 1.
24. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13-17.
25. キケロー、『神々の本性について』I. 16, 17. ディオゲネス・ラエルティオスは、プロレープシスについて、それは本来エピクロス派の考え方であり、「一種の直接的把握(直覚像、カタレープシス)、または、正しい思いなし(オルテー・ドクサ)、あるいは、心像(エンノイア)、ないしは、(心のなかに)貯えられている普遍的概念(カトリケー・ノエーシス)」であると説明している。ディオゲネス・ラエルティオス著・加来彰俊 訳『ギリシャ哲学者列伝(下)』X.1.33. Cf. Patrides, *The Cambridge Platonists*, 128. n.1. スミスがエピクロス派への明言を避けているのは、エピクロスが「徳と悪徳の境界を明言することに疑いをもつ」、およびエピクロス主義者たちが「感覚性という最深の忘却の河の中で自分自身の正覚の理性を溺れさせてしまっている」などの理由によるものと推察できる。“The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13, 17. あるいは、エピクロスの抱いた、神々は存在するけれども人間界のことに配慮しないという神観も、スミスを躊躇させたかもしれない。“The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13.
26. 『エンネアデス』I. 41, 115.
27. キケロー『神々の本性について』I.2, 29, 63, 117. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13.
28. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13. 英語のスペリングは原文のままとする。
29. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 13.
30. W. E. Hough, “The Religious Philosophy of John Smith”, *The Baptist Quarterly* 3.8(1927), 356

- は、スミスの理性観はプラトンの靈魂論と共鳴するとして、「このプラトンの理性は、スミスにとって魂の器官であり、人間が神と交わりをもつことを可能とする、人間の内在する宗教的知識と神的原理の道具である」という考えを述べる。
31. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 2.
32. 『エンネアデス』 I. 8. 『プロティノス全集』（中央公論社、1976年）I, 312. Cf. アリストテレス『魂について』 I 2, 404b 17-18, γινώσκεσθαι γὰρ τῷ ὁμοίῳ τὸ ὅμοιον. 以後、プロティノスの邦訳は基本的に『プロティノス全集』I-IV（中央公論社、1986-7年）を使用する。
33. 「箴言」9.1; 「詩編」111.10.
34. 田村秀夫編著『イギリス革命と千年王国』（1990年、同文館）第2章、岩井淳「革命的千年王国論の担い手たち——独立派千年王国論から第五王国派へ——」、75-112を参照。
35. ウィッチコットの時代におけるイングランドの正統派ピューリタニズムは、教会政治の面では長老主義の立場を、神学理解の面ではカルヴィニズムの立場をとっていた。それゆえ、神学の観点からピューリタニズムが言及される場合、ピューリタン・カルヴィニズムという用語が使用される。Cf. J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism in Seventeenth Century England* (Martinus Nijhoff/ The Hague, 1968), 42-65.
36. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 2.
37. Cf. A. H. アームストロング著 岡野昌雄・川田親之 訳『古代哲学史』（みすず書房、1987年）、233-245.
38. 『エンネアデス』、V. 3 .12. 40-44.
39. 「マタイによる福音書」5. 8.
40. プロティノス『エンネアデス』「美について」、I. 6. 9. 31. Cf. プラトン『国家』、VI. 508b3, 509a1.
41. プロティノス『エンネアデス』「美について」、I. 6. 9. 32-33.
42. プロティノス『エンネアデス』「美について」、I. 6. 8. 4. Cf. プラトン『パイドロス』、247A6-7.
43. 「コリントの信徒への手紙一」8. 1.
44. プロティノス『エンネアデス』「ディアレクティケーについて」、I. 3. 4. 11; 『エンネアデス』「いかにしてアイデアの群れが成立したか。および善者について」、VI. 7. 13. 34; プラトン『パイドロス』、248B6.
45. プロティノス『エンネアデス』「徳について」、I. 2. 6. 13.
46. 「ヨハネの手紙一」1. 1.
47. プロティノス『エンネアデス』「生命あるものとは何か、人間とは何か」、I. 1. 6. 10-15. Cf. D. Michaud, “The Patristic Roots of John Smith’s “True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge”” in [Eds.] Thomas Cattoi & June McDaniel, *Perceiving the Divine through the Human Body: Mystical Sensuality* (Palgrave Macmillan, 2011). Michaud は、スミスの魂の感覚性の考えにはオリゲネスの靈的感覚性の考えの影響があると指摘する。
48. 「詩編」34. 9. スミスはプロティノスを引き合いに出すが、この語句はプロティノスの中にはない。しかし、プラトン『パイドン』67C3 に、「完全に浄化されたものとしての思考」(τὴν διάνοιαν ὡς περ κεκαθαμένην) という文言はある。
49. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 3.
50. 「創世記」2. 9.
51. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, Discourse, 3-4; Patrides, 130.
52. ピーコ・デッラ・ミランドラ「人間の尊厳についての演説」、佐藤三夫訳編『ルネサンスの人間論—原典翻訳集—』（有信堂高文社、1984年）、219.
53. Cf. 「創世記」2. 10-14.
54. この文言がオリゲネスのものかどうかは確かではないが、オリゲネスの精神を伝えているものであるとは言えよう。Cf. オリゲネス、『ヨハネによる福音注解』（創文社、1984年）X, 25; Patrides, 130.n.14.
55. E. A. George, *Seventeen Century Men of Latitute*, 96.
56. 『国家』、514A1以下。
57. 『国家』、621C1-2.
58. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, Discourse, 17; Patrides, 140.
59. 『博物誌』、9. 183.
60. 『動物特性論』、1. 3. 6.
61. Patrides, 132. n. 21.
62. 『エンネアデス』「美について」、I. 6. 5. 41-43. スミスはギリシャ語原文を自分の用途に合わせて引用している。原文は以下のとおりである：

- Ἄκαθαρτος δὴ, οἶμαι, οὐσα καὶ φερομένη πανταχοῦ ὀλκαῖς πρὸς τὰ τῆ αἰσθήσει προσπίπτοντα, πολὺ τὸ τοῦ σώματος ἔχουσα ἐγκεκραμένον, τῷ ὑλικῷ πολλῶ συνούσα καὶ εἰς αὐτὴν εἰσδεξαμένη εἶδος ἕτερον ἠλλάξατο κράσει τῆ πρὸς τὸ χεῖρον.
- 「醜い魂とは不浄な魂のことで、感覚に訴える魅力に惹かれてどこへでも引きずられ、多くの肉体的なもの混じり合い、質料的なもの数多く交わってこれを自分の中に取り入れ、自分を劣ったものとするような混合によって変化し、別の形をとるにいたったのだろう。」
63. 『動物特性論』、I. 37.
64. キケロー『トゥスクルム荘対談集』、II. 4. 11.
65. 41章3-4節、19-21節、27節。
66. 210A1.
67. 250C4.
68. プロティノス『エンネアデス』「グノーシス派に対して」、II. 9. 15. 33, 39-40. Cf. アリストパネス『雲』、225.
69. タルムード「安息日」30b を改変した文言と思われる。
70. スミスはプロティノスを引き合いに出すが、この語句はプロティノスの中にはない。しかし、プラトン『パイドン』、67C3 に「完全に浄化されたものとしての思考」(τὴν διάνοιαν ὡσπερ κεκαθαρμένην) という文言はある。
71. 『ニコマコス倫理学』、1095a2 ff.
72. イアンプリコス『ピュタゴラス的生活』、71-72.
73. プラトン『ソピステス』、253E5-6への言及であろう。
74. 「肉体からの分離」に関しては、cf. プラトン『パイドン』、67C6-7, 67D4-5, 9-10; プロティノス『エンネアデス』「幸福について」、I.4.14.2-3; 『エンネアデス』「グノーシス派に対して」、II.9.6.40-41など; イアンプリコス『神的秘儀』「エジプトの秘儀」、XII.
75. プラトン『パイドン』、81A1-2, 67E4-5, 64A4-B9.
76. プラトン『国家』、514A1ff. プロティノス『エンネアデス』「グノーシス派に対して」、II.9.6.8-9.
77. Patrides, 136.
78. Cf. H. L. Stewart, “Ralph Cudworth, The “Latitude Man””, *The Personalist* 32(1951) 163-4; D. Brunton and D. H. Pennington, *Members of the Long Parliament*(George Allen & Unwin Ltd., 1954), xi.

79. 『ノヴム・オルガヌム』、I.42, 53-59.
80. “The True Way or Method,” *Select Discourses*, Discourse, 12; Patrides, 137.
81. フィロン、オリゲネス、ディオゲネス・ラエルティオス、その他のプラトン主義者たちの思想を応用した文言ではないと思われる。Cf. *Stoicorum Veterum Fragmenta* III, ed. Hans von Arnim (Leipzig, 1903-24), 4vols., 86, 89, 146, etc; Patrides, 137, n.41.
82. プロティノスの引用に次いでプラトンの引用が多いのが、この「講話」の特徴であるが、アリストテレスは排斥されていない。スミスは、古代ギリシャの哲学者たちも神知に至る方法論を知らなかったわけではないという考えを述べた上で、第一番目に、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』、1095a2 ff. に言及し、若者は道徳上の教訓に手を出す前に、まず「若者特有の情動の熱烈さと軽率さ」が緩和されなければならないという見解を紹介している。アリストテレスに続いて、ピュタゴラス、プラトン、イアンプリコスの考え方も紹介している。
83. Patrides, 137.
84. Patrides, 137.
85. Patrides, 137.
86. 前5世紀の最後の数10年にアテナイで活動した抒情詩人。無神論者とみなされた。
87. 前5世紀に活動した有名なソフィスト。
88. シケリアに生まれた古代ギリシャの歴史家で、前1世紀に活動。彼が魂の不死を疑問視したかどうかは不明である。
89. 紀元86年頃—紀元160年頃。ギリシャの歴史家・哲学者。アレクサンドロス大王の遠征の記述で知られる。エピクテトスの『語録』と『提要』の保存に貢献した。
90. Patrides, 138-139.
91. Patrides, 139.
92. Patrides, 139.
93. プロティノス『エンネアデス』「善なるもの一なるもの」、VI.9.4.11-12.
94. プロティノス『エンネアデス』「いかにしてイデアの群れが成立したか。および善者について」、VI.7.26.22.
95. ブロクロス『神学綱要』209.
96. プロティノス『エンネアデス』「エロスについて」、III.5.7.39.
97. プラトン『パイドン』、81A以下。プロティノス『エンネアデス』「魂の肉体への降下について」、

- IV.8.1, 8.3.
98. プロティノス『エンネアデス』「美について」、I.6.8.26-27.
99. プロティノス『エンネアデス』「悪とは何か」I.8.14.41、『エンネアデス』「善なるもの一なるもの」、VI.9.7.16. Patrides, 140.
100. プルタルコス『イシスとオシリスについて』、LXVIII. 378B
101. アリストテレス『命題論』、17a8.
102. この文言の出典は不明だが、プラトン『法律』、791A2-3に「魂の内なる平静・平穩」(*γαλήνην ἡσυχίαν τε ἐν τῇ ψυχῇ*) という文言がある。
103. Patrides, 140.
104. Cf. Basil Willey, *The Seventeenth-Century Background* (Penguin Books, 1962), 251-253.
105. シンプリキオス『エピクテトス『提要』注解』、4C.
106. プルタルコスの中にこの語句はないが、*Moralia*, De E Apud Delphos, 392.A.11に *δόκησιν ἀμωδράν* という語句はある。そこでは、およそ死すべき性質をもつものはすべて、生成と消滅の間のなんらかの段階にあり、自分のおぼろげで不確かな外見しか呈しないことが語られる。『エンネアデス』「非物的なものの非受動性について」、III.6.4.21には、*ἀμωδρά οἶον δόξα* という語句がある。
107. スミスはプラトンというが、この文言はプロティノスのものである。Cf. プロティノス『エンネアデス』「善なる者一なる者」、VI. 9. 4. 22.
108. シンプリキオス『エピクテトス『提要』注解』、4B, 5A, 2B.
109. プラトン『饗宴』、210A1、『パイドロス』、250C4.
110. シンプリキオス『エピクテトス『提要』注解』、5A.
111. シンプリキオス『エピクテトス『提要』注解』、4A-B.
112. プロティノス『エンネアデス』「エロスについて」、III. 5. 7. 22.
113. セネカがエピクロスに帰する文言である。Cf. セネカ『倫理書簡集』、XXV.
114. Patrides, 142.
115. シンプリキオス『エピクテトス『提要』注解』、4B.
116. プロティノス『エンネアデス』「善なるもの一なるもの」、VI. 9. 9. 25-39.
117. プロティノス『エンネアデス』「善なるもの一なるもの」、VI. 9. 10. 17.
118. プロティノス『エンネアデス』「美について」、I. 6. 7. 30.
119. パウサニアス『ギリシャ案内記』、I. 30. 1, VI. 23. 3, 5.
120. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 21.
121. 「ヨハネの手紙一」 3. 20.
122. 「ヘブライ人への手紙」 1. 3. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 21.
123. Smith, “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 21; Patrides, 143-4.
124. “The True Way or Method ,” *Select Discourses*, 21.
125. C. Taliaferro and A. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality*, 29 は、スミスについて次のように述べる。「悲しいことに、彼は35歳で肺結核のため逝去した。彼は欠けるところのない人だったようである。真に善き敬虔なキリスト者であり、“彼の魂には愛が泡立ちわき起こっていた”。会うのがいつも楽しみになるような人物だった。彼の信仰は彼を“神に似た”ものに変え、彼は“神の子への信仰によって生きた”。また大なる学識の人であり、彼の友人のサイモン・パトリックによる告別説教において“生ける図書館... 歩く研究室”と述べられた。」 500冊を超える彼の壮大な蔵書は、クイーンズ学寮に寄贈された。」 Cf. Simon Patrick, “A Sermon Preached at the Funeral of Mr. John Smith with a Short Account of his Life and Death”, John Worthington, *Select Discourses*.